

行

人

他一編

夏目漱石

旺文社文庫



## 「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長 赤尾心夫

〔編集顧問〕 小田切進 茅 誠司 木村 毅  
中島健蔵 森戸辰男 (五十音順)

旺文社文庫 行 人 他一編 定価はカバーに表  
示してあります



昭和42年5月10日 初版発行  
昭和48年8月20日 重版発行  
著 者 夏 目 漱 石  
発 行 者 鳥 居 正 博  
印 刷 所 株式会社 文 弘 社

発 行 所 株式会社 旺 文 社  
162 東京都新宿区横寺町  
電 話 東京 (03) 267-1111 (代)

0193 610-46 0724

806130

© 旺文社 1967

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

書店または本社に直接お申し込み  
書落丁・乱丁・不良本はお取り替  
えさせていただきます

(中村印刷・穴口製本)

旺文社文庫

行 人

(他) 初秋の一日

夏目漱石著

旺文社



## 目次

行こう人じん

初秋の一日

解 説

人と文学

作品解説

作品鑑賞

『初秋の一日』について

『行人』を読んで

夏目漱石先生の追憶

代表作品解題

参考文献

年 譜

本多ほんだ顕彰あきら阪本さかもと勝まさる  
寺田てらだ寅彦とらひこ挿絵  
賀茂牛之

五

四三

四九

四九

四三

四九

四五

四七

四一

四五

四一

四二

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこな  
われない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。  
また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

(編集部)

行こう

人じん





## 友 達

一

梅田の停車場ステーションを下りるやいなや自分は母から言いつけられたとおり、すぐ俵くるまを雇って岡田の家に駆けさせた。岡田は母方の遠縁に当たる男であった。自分は彼がはたして母のなにに当たるかを知らずにただ疎うとい親類とばかり覚えていた。

大阪へ下りるとすぐ彼を訪うたのには理由があった。自分はここへ来る一週間前ある友達と約束をして、今から十日以内に阪地で落ち合おう、そうしていっしょに高野こうや登りをやろう、もし時日が許すなら、伊勢から名古屋へ回ろう、と取りきめた時、どっちも指定すべき場所をもたないので、自分はいい岡田の氏名と住所を自分の友達に告げたのである。

「じゃ大阪へ着き次第、そこへ電話をかければ君のいるかいはいかは、すぐわかるんだね」と友達には別れるとき念を押した。岡田が電話をもっているかどうか、そこは自分にもはなはだあやしかったので、もし電話がなかったら、電信でも郵便でもいいから、すぐ出してくれるように頼んでおい

(1) 東海道本線の大阪駅の旧称。現在の梅田駅は、貨物専用駅および阪神線・阪急線の起点になっている。(2) 和歌山県西北部にある山。僧空海が創建した金剛峰寺こんごうぶじがあり、ふつう高野山という場合その寺をさす。

た。友達は甲州線(1)で諏訪まで行って、それから引き返して木曾を通ったあと、大阪へ出る計画であった。自分は東海道を一息に京都まで来て、そこで四、五日用たしかたがた逗留とうりゆうしてから、同じ大阪の地を踏む考えであった。

予定の時日を京都で費やした自分は、友達の消息たよりを一刻も早く耳にするため停車場ていしやばを出るとともに、岡田の家を尋ねなければならなかったのである。けれどもそれはただ自分の便宜になるだけの、いわば私の都合つごうにすぎないので、さっき言った母の言いつけとはまるで別物であった。母が自分に向かつて、あちらへ行ったらなにより先に岡田を尋ねるようにと、わざわざ荷になるほど大きいかん罐入りの菓子を、お土産みやげだよと断わって、鞆かばんの中へ入れてくれたのは、昔気質むかしかたぎの律儀からではあるが、その奥にもう一つ実際的の用件を控えているからであった。

自分は母と岡田が彼らの系統上どんな幹の先へわかれて出た、どんな枝となって、互いに関係しているか知らないくらいな人間である。母から依託された用向きについても大した期待も興味もなかった。けれども久しぶりに岡田という人物——落ち着いて四角な顔をしている、いくら髭ひげをほしがつても髭の容易に生はえない、しかも頭のほうがそろそろ薄くなって来そうな、——岡田という人物に会うほうの好奇心は多少動いた。岡田は今までに所用でときどき出京した。ところが自分はいつもかけ違ちがって会うことができなかった。したがって強く酒精アルコールに染められた彼の四角な顔も見ることが奪うばわれていた。自分は俵くろまの上で指を折って勘定してみた。岡田がいなくなったのは、ついこのあいだのようでも、もう五、六年になる。彼の気にしていた頭も、このごろではだいぶ危険にせま

(1) 今の中央本線の旧称。

っているだろうと思つて、その地の透いて見えるところを想像したりなどした。

岡田の髪の毛は想像したとおり薄くなつていたが、住居は思ったよりもさっぱりした新しい普請であつた。

「どうも上方流かみがたりゆうでよけいなところに高たか堀べいなんか築き上げて、陰気で困こまちまいます。その代わり二階はあります。ちょっと上がつてごらんさい」と彼は言つた。自分はなにより先に友達のが気になるので、こうこういう人からまだなんとも通知は来ないかと聞いた。岡田は不思議そうな顔をして、いいえと答えた。

二

自分は岡田に連れられて二階へ上がつてみた。当人が自慢するほどあつて眺望はかなりよかつたが、縁側のない座敷の窓へ日が遠慮なく照り返すので、暑さは一とおりでなかつた。床の間に懸けてある軸物もそっくり返つていた。

「なに日が射すためじゃない。年が年じゅう懸けとおしだから、糊のりの具合でああなるんです」と岡田はまじめに弁解した。

「なるほど梅うめに鶯うぐいすだ」と自分も言いたくなつた。彼は世帯しよたいを持つ時の用意に、この幅あぢを自分の父からもらつて、大得意で自分の室へやへ持つて来て見せたのである。その時自分は「岡田君この呉春ごしゆんは

(1) 松村月溪。一七五二—一八一、江戸後期の画家。俳人。一七八二年以後、呉春と号した。与謝蕪村の門で南画的写生風の画法を、円山応挙の門で写実主義を学んで、四条派の開祖としての画風を決定づけた。

偽物だよ。それだからあの親父が君にくれたんだ」と言ってからかい半分岡田を怒らしたことを覚えていた。

二人は懸け物を見て、当時を思い出しながら子供らしく笑った。岡田はいつまでも窓に腰を掛けて話を続けるふうに見えた。自分も襯衣に洋袴だけになってそこに寝ころびながら相手になった。そうして彼から天下茶屋の形勢だの、将来の発展だの、電車の便利だのを聞かされた。自分は自分にそれほど興味のない問題を、ただ素直にはいいいと聞いていたが、電車の通じるころへわざわざ俵へ乗って来たことだけは、馬鹿らしいと思った。二人はまた二階を下りた。

やがて細君が帰って来た。細君はお兼さんといって、器量はそれほどでもないが、色の白い、皮膚のなめらかな、遠見のたいへんいい女であった。父が勤めていたある官省の属官の娘で、そのころはときどき勝手口から頼まれものの仕立て物などを持って出入りをしていた。岡田はまたその時分自分の家の食客をして、勝手口に近い書生部屋で、勉強もし昼寝もし、時には焼き芋なども食った。彼らはかようにして互いに顔を知り合ったのである。が、顔を知り合ってから、結婚が成立するまでに、どんな径路を通過して来たか自分はよく知らない。岡田は母の遠縁に当たる男だけれども、自分の宅では書生同様にしていたから、下女たちは自分や自分の兄には遠慮して言いかねることもまでも、岡田に対してはつけつけと云ってのけた。「岡田さんお兼さんがよろしく」などという言葉は、自分もときどき耳にした。けれども岡田はいっこう気にも止めない様子だったから、おおかた

(1) 大阪市西成区の、住吉と今宮との間にある地名。豊臣秀吉が休憩した茶店があったので名づけられた。(2) 遠くから見ると。

ただのいたずらだろうと思っていた。すると岡田は高商を卒業して一人ひとりで大阪のある保険会社へ行ってしまった。地位は自分の父が周旋したのだそうである。それから一年ほどして彼はまた飄然ひようぜんとして上京した。そうして今度はお兼さんの手を引いて大阪へ下って行った。これも自分の父と母が口をきいて、話をまとめてやったのだそうである。自分はその時富士へ登って甲州路を歩く考えで家にはいなかったが、あとでその話を聞いてちょっと驚いた。勘定してみると、自分が御殿場で下りた汽車とすれ違って、岡田は新しい細君を迎えるために入京したのである。

お兼さんは格子こうしの前でたたんだ洋傘こうもりを、小さい包みといっしょに、脇の下に抱かかえながら玄関から勝手のほうに通り抜ける時、ちょっとときまりのわるそうな顔をした。その顔は日盛りの中を歩いた火気ほてりのため、汗を帯びて赤くなっていた。

「おいお客さまだよ」と岡田が遠慮のない大きな声を出した時、お兼さんは「ただいま」と奥のほうでやさしく答えた。自分はこの声の持ち主に、かつて着た久留米くろめ紆めがすりやフランネル(2)の襦袢じゆばんを縫ぬってもらったこともあるのだなとふとなつかしい記憶を喚起した。

三

お兼さんの態度は明瞭で落ち着いて、どこにも下卑げびた家庭に育ったという面影は見えなかった。

「二、三日さんちまえ前からもうおいでだろうと思つて、心待ちにお待ち申しておりました」などと言つて、眼の縁かちに愛嬌あいぎやうをただよわせるところなどは、自分の妹よりも品のいいばかりでなく、様子もいくぶ

(1) 久留米地方から産する、丈夫な、もめんの紺紆こんがすり。(2) ネル。紡毛糸ぼうもうしを主として荒く織つた、柔らかく厚めの布。

んか立ちまきって見えた。自分はしばらくお兼さんと話しているうちに、これなら岡田がわざわざ東京まで出て来て連れて行ってもしかるべきだという気になった。

この若い細君がまだ娘盛りの五、六年前に、自分はすでにその声も眼鼻立ちも知っていたのであるが、それほど親しく言葉をかわす機会もなかったので、こうして岡田夫人として改まって会ってみると、そうなれなれしい応対もできなかった。それで自分は自分と同階級に属する未知の女に對するごとく、かしこまった言語をぼつぼつ使った。岡田はそれがおかしいのか、またはうれいいのか、ときどき自分の顔を見て笑った。それだけならかまわないが、折節はお兼さんの顔を見て笑った。けれどもお兼さんは澄ましていた。お兼さんがちょっと用があつて奥へ立った時、岡田はわざと低い声をして、自分の膝をつつきながら、「なぜあいつに對して、そう改まつてるんです。もとから知ってる間柄じゃありませんか」とひやかすような句調で言った。

「いい奥さんになったね。あれなら僕がもらやよかった」

「冗談いっちゃいけない」と言つて岡田はいっそう大きな声を出して笑った。やがて少しまじめになつて、「だってあなたはあいつの悪口をお母さんに言つたつていうじゃありませんか」と聞いた。

「なんて」

「岡田も気の毒だ、あんなものを大阪くんだりまで引っぱって行くなんて。もう少し待っていればおれが相当なのを見つけてやるのになつて」

「そりゃ君昔のことですよ」

こうは答えたようなものの、自分は少し恐縮した。かつちょっと狼狽した。そうしてさっき岡田が変な眼づかいをして、ときどき細君のほうを見た意味をようやく理解した。

「あの時は僕も母からたいへん叱られてね。お前のような書生になにがわかるものか。岡田さんのことはお父さんと私とで当人たちに都合のいいようにしたんだから、よけいな口をきかずに黙って見ておいでなさいって。どうも手ひどくやられました」

自分は母から叱られたという事実が、自分の弁解にでもなるような語気で、その時の様子を多少誇張して述べた。岡田はますます笑った。

それでもお兼さんがまた座敷へ顔を出した時、自分は多少きまりのわるい思いをしなければならなかった。人のわるい岡田はわざわざ細君に、「今二郎さんがお前のことをたいへんほめてくださったぜ。よくお礼を申し上げるがいい」と言った。お兼さんは「あなたがあんまり悪口をおっしゃるからでしょう」と夫に答えて、眼では自分のほうを見て微笑した。

夕飯前に浴衣がけで、岡田と二人岡の上を散歩した。まばらに建てられた家屋や、それを取りまく垣根が東京の山の手を通り越した郊外を思い出させた。自分は突然大阪で会合しようと約束した友達の消息が気になりだした。自分はいきなり岡田に向かって、「君のところじゃ電話はないんでしょうね」と聞いた。「あの構えで電話があるように見えますかね」と答えた岡田の顔には、ただ機嫌のいい浮き浮きした調子ばかり見えた。

(1) 本郷・小石川・牛込・四谷などの東京の旧市内を、下町に対していう。いくぶん高台になっていて住宅地が多い。

それは夕方の比較的長く続く夏の日のことであつた。二人の歩いてゐる岡の上はことさら明るく見えた。けれども、遠くにある立ち樹の色が空に包まれてだんだん黒ずんで行くにつれて、空の色も時を移さず変わつて行つた。自分は名残りの光で岡田の顔を見た。

「君東京にいた時よりよほど快活になつたようですね。血色もたいへんいい。結構だ」

岡田は「ええまあおかげさまで」と言つたような曖昧な挨拶をしたが、その挨拶のうちには一種うれしそうな調子もあつた。

もう晩飯の用意もできたから帰ろうじゃないかと言つて、二人帰路についた時、自分は突然岡田に、「君とお兼さんとはたいへん仲がいいようですね」といつた。自分はまじめなつもりだつたけれども、岡田にはそれがひやかしのやうに聞こえたと見えて、彼はただ笑うだけでなんの答えもしなかつた。けれども別に否みもしなかつた。

しばらくしてから彼は今までの快活な調子を急に失つた。そうしてなにか秘密でも打ち明けるような具合に声を落とした。それでいて、あたかもひとり言をいう時のやうに足もとを見つめながら、「これであいつといつしよになつてから、かれこれもう五、六年近くになるんだが、どうも子供ができないんでね、どういふものか。それが気がかりで……」と言つた。

自分はなんとも答えなかつた。自分は子供を生ますために女房をもらう人は、天下に一人もあるはずがないと、かねてから思つていた。しかし女房をもらつてからあとで、子供がほしくなるもの



かどうか、そのところになると自分にも判断がつかなかった。

「結婚すると子供がほしくなるものですかね」と聞いてみた。

「なに子供が可愛いかどうかまだ僕にもわかりませんが、なにしろ妻たるものが子供を生まなくっちゃ、まるで一人前の資格がないような気がして……」

岡田はたんにわが女房を世間並みにするために子供を欲するのであった。結婚はしたいが子供ができるのがこわいから、まあもう少し先へ延ばそうという苦しい世の中ですよと自分は彼に言ったりたかった。すると岡田が「それに二人ぎりじゃ淋しくってね」とまたつけ加えた。

「二人ぎりだから仲がいいんでしょ」

「子供ができると夫婦の愛は減るもんでしょ」

岡田と自分は実際二人の経験以外にあることをさも心得たように話し合った。

宅では食卓の上に刺身だの吸い物だのがきれいに並んで二人を待っていた。お兼さんは薄化粧をして二人のお酌をした。ときどきは団扇を持って自分をあおいでくれた。自分はその風が横顔に当たるたびに、お兼さんの白粉の匂いをほのかに感じた。そうしてそれが麦酒や山葵の香よりも人間らしいいい匂いのように思われた。

「岡田君はいつもこうやって晩酌をやるんですか」と自分はお兼さんに聞いた。お兼さんは微笑しながら、「どうも後引き上戸で困ります」と答えてわざと夫のほうを見やった。夫は、「なにあとが引けるほど飲ませやしないやね」と言っ、そばにある団扇を取って、急に胸のあたりをはたはた

(1) あくことを知らず、むやみに酒をほしがるくせのある酒飲み。